

2025.10.06.

T.Kobayashi

二冊の書籍といくつかの奇縁 その3

吉岡と宮床を訪ねる旅

9月も半ばになり、台風もひとつ通り過ぎて静寂が戻った頃合いを見て、旅が動き出した。

母の書架から出てきた「原阿佐緒全歌集」と「原阿佐緒の生涯」の二冊の本を、宮城県黒川郡大和（たいわ）町にある「原阿佐緒記念館」に寄付することを願い出たところ、お受けいただけることになった。二冊の書籍を携えて、お届けに行くというのがこの旅の目的である。

事務手続きのために大和町役場（黒川郡大和町吉岡）を訪ね、ついでに原阿佐緒記念館を見学しようという旅程だが、この間の距離は約6Kmあり、移動の手段が乏しいので、車で出かけることにした。

9月17日、晴天の輝きの中、国道16号線の朝の通勤ラッシュを避けて、9時すぎに家を出発。すでに気温は30度を超えている。柏ICから常磐自動車道に入り、中郷SAで昼食。

福島県に入ると、路肩の要所に放射線量を示す電光表示が設置されていて、一瞬緊張が走る。気をつけて見ていると、0.1シーベルトから1.4シーベルトまで、場所によって様々だった。

南相馬鹿島SAで二度目の休憩をとって余裕のある旅を続けたが、相馬の山裾から仙台平野の南端に出る頃に突然の豪雨。

時速70Km位に落として、ワイパーを最速にして注意深く走り続ける内に雨は小降りになり、仙台市内を過ぎる頃には小雨も止んだ。

利府JCTから仙台北道路に入り、15時半過ぎに大和ICを下りて大和町の吉岡に到着。

宿泊予定のホテルの場所を確かめた後で、役場を訪問。

生涯学習課で、予めの打合せ通り寄付する書籍の引渡しを行ない、無事任務を果たして一段落。

今回の窓口となった生涯学習課のFさん、N課長などと歓談し、町の歴史など様々なお話をお聞きして、役場を辞した。

伊達藩の城下町「吉岡」を、日没時刻と競り合いながら見物した後、ホテルルートイン仙台大和インターに入った。

9月18日、昨夜の雨が朝には止んだが、太陽の光は見られない曇天。

再び町を散策のあと、大和町宮床へ移動し、原阿佐緒記念館を訪問。記念館見学の後は、宮城県南部の白石市まで移動して、伊具郡丸森町大張へ。

白石で購入した線香を持って、母方の先祖が眠る「柳沢共同墓地」で墓参。ついでに小学校時代に一年間を過ごした大張の村をぶらついた後、阿武隈川に沿って角田・丸森経由で浜通りに出た。

宮城・福島県境の海岸線は地震による津波で大きな被害を受け、復興の途上にあった。新地で一泊。

9月19日、旅の最終日は再び快晴、浜街道を南下して、津波被害・原発事故により被害を受けたいくつかの町の現況を確認しながら走り、北茨城ICから常磐自動車道に入って帰宅した。

●黒川郡吉岡

続日本紀によれば、天平14年（742年）に「黒川」の地名の表記があり、これが国史上に残された最も古い記録とされている。

続日本後紀によれば、承和8年（841年）に黒川郡の大領として靫伴連黒成（ゆげいのとものむらじくろなり）の名前が残っている。また、大和町東部の大和IC付近の落合舞野という所にある観音堂は

大同3年(808年)坂上田村麻呂の勸請によるものという記録もあるらしい。

正平9年(1354年)、若狭国守護として足利義詮に仕えていた斯波家兼が奥州管領として着任。家兼は正平11年(1356年)に逝去し、奥州管領の任務を嫡男大崎直持(ただもち)が受け継いだ。大崎を名乗ったのは、足利家氏が領していた下総国香取の大崎庄を治めていたことによるもの。黒川郡一帯を大崎氏が支配していた時代に、その配下の黒川氏直の所領とされていた。

天正18年(1590年)、黒川晴氏が伊達政宗に敗れ、伊達家の三男である伊達宗清の所領となった。宗清は当初は下草城を居城としていたが、元和2年(1616年)に吉岡に城を構えて移った。所領は38,000石と記録が残っている。吉岡は、それまでは今村という村名だったので、いずれかのタイミングに、「良し岡」という瑞祥地名が付されたのかもしれない。

築城とともに街作りが進められて、城下町であると同時に宿場町としても整えられた。奥羽街道・羽後街道と松島道の拠点として利便性が高く、栄えるようになった。

吉岡城跡と城下町は、松島湾に注ぐ鳴瀬川の支流である吉田川に善川(ぜんかわ)が合流する地点の海拔30m余の見晴しの良い丘陵地帯にある。

町が造られた時には、奥羽街道は城下町を鉤状に走り、いくつかある小刻みな曲がり角には木戸や門が設けられており、城の守りを固めていたと言う。

寛永11年(1634年)宗清の没後、伊達家の直属となり一時的に黒木氏が治めたが、寛文2年(1662年)に仙台藩の筆頭奉行である奥山常辰(つねとき・通称奥山大学)が治めた。のちに奥山常辰は仙台藩の内紛(伊達騒動)で失脚して吉岡に引き下がった。

宝暦6年(1756年)に但木顕行がその後を継ぎ、五代目当主である但木土佐成行の代で明治維新となった。

●國恩記

吉岡では、こんな出来事もあった。

明和3年(1766年)のこと、仙台藩の宿場町吉岡には、藩から「伝馬役」が課せられていた。しかし仙台藩の直轄地ではなかったため、伝馬役への助成金が支給されず、この役割を果たす民は費用の持ち出しになって、困窮が深まり、吉岡を出て他所へ移る人も出始めていた。

吉岡の造り酒屋の穀田屋十三郎が中心となって前例のない突飛なアイデアが動き出した。地元の有志九人が8年をかけて捻出した千両を仙台藩に貸して、戴いた利息を吉岡の財政に役立てようという計画で、代官・奉行を通じて藩の中樞に持込まれて実現した。安永2年(1773年)頃から、毎年年末に百両の利息を受け取り、宿場町の運営にあてられた。

この経緯は、龍泉院の栄洲瑞芝和尚の手により「國恩記」として文字で残されており、仙台藩の歴史文書の中にも取り込まれているという。また、できごとの一部始終は後に歴史学者磯田道史氏によりノンフィクション作品として紹介され、2016年には映画化もされたそうである。

城下町の東端にある龍泉院には栄洲瑞芝の墓があり、東隣の九品寺には國恩記顕彰碑がある。奥州街道が緩やかな坂を登って、鉤状の曲がり道を繰り返しながら城下町に入ってく所があり、吉岡の地形と城下町の形がよくわかる。

●奥山大学と但木土佐成行

奥山大学常辰(つねとき)は、仙台藩の重臣である奥山常良の次男で、父の死後家督を相続して奉行職に就任した。所領として柴田郡村田を持っていたが、岩沼藩領として提供することになり、その代替地として肥沃な黒川郡吉岡を得て、知行高6000石を手に入れた。これにより藩内に燻る不満が噴出し内輪もめが発生。結果として奥山常辰は辞職し、藩政の中樞からも外された。

前述のように、宝暦6年(1756年)に但木顕行がその後を継ぎ、五代目当主である但木土佐成行の

代で明治維新となった。

但木土佐成行は、文政元年（1818年）に仙台で生まれた。23才で家督を相続して今村（今の吉岡）を拝領。35才で奉行に任じられた。吉岡の財政再建に尽力する傍ら、新規事業の発掘に尽力し、外国文化の吸収にも意欲的だった。

幕末の混乱期には会津藩救済に走り、平和的解決に努力したが良い結果が得られず、奥羽越列藩同盟として西軍の西郷隆盛と戦うことになってしまった。

戊辰戦争が終り明治元年に謹慎の身となり、明治2年に麻布の仙台藩屋敷で処刑された。麻布十番から西へ入る道を歩くと仙台坂という坂がある。仙台藩屋敷があったことから生まれた名前である。国家の動きとしては戊辰戦争の負け組となりはしたが、吉岡では民に愛される領主で、地元での評価は高いようである。

海拔 30mの吉岡の北西の端に保福寺という寺がある。寛文5年（1665年）、奥山常辰によって建てられた寺で、正式名称は臨済宗妙心寺派天祥院保福寺。奥山常辰の墓の他に、但木土佐成行の招魂碑も建っており伊達の家臣達の墓もある。

奥山大学・但木成行の墓の区画の中に、配下の側近の武士達の墓石が建っているが、これは伊達の墓地の特徴らしい。

本堂にはご本尊（阿弥陀如来立像）の他に、伊達家の主要人物の位牌等が安置されていて、ご住職の案内を得てひととおり見学・鑑賞をすることができた。

●黒川郡宮床村

女流歌人原阿佐緒が生まれた宮床村は、吉岡から南西に 6Km ほどの所にある。西に七ツ森の山波を眺め、城下町・宿場町の吉岡とは対照的に海拔 100m程度の尾根が入り組む静かな田舎だ。

古代黒川郡の時代には黒川三郷のひとつと言われていた新田郷に属していた。

宮床村の村史によれば、古くは難波村（なにわむら）と言われていたが、信楽寺（しんぎょうじ）創立に関わって「宮床」と名を変えたという記録が残っている。

飯峯山信楽寺は、七ツ森の七つのピークのひとつである松倉山（290.7m）の麓にあった。

「824年に淳和天皇の勅願により慈覚大師が開基」とされており、当初は天台宗だった。開山にあたり宮方（仁和宮）の下向があり、永住に至ったこともあり、「宮床」と呼ばれるようになった。

後に光孝天皇の御代に火災で焼失。仁和年間（885年～889年）に再建され、この時に新義真言宗に変わったと伝えられている。

明治7年に山火事で再び全滅してしまい、「信楽寺遺跡」として守られてきた。この寺には淳和天皇と恒貞親王の墓と言われている九輪の塔が二基あり、土地の者はこれを「宮様御院」と呼んでいた。昭和44年～45年に発掘調査を行なった結果、四方を木炭で囲った中に、髪一束・骨一本と開元通宝（唐の通貨）と支那銭一枚が納められていたことがわかった。

なぜこの地に天皇の陵があったのかはわかっていないらしいが、淳和天皇は、「崩御の際は火葬を希望」していたという記録もあり、分骨の納骨がされたのかもしれない。また、発掘調査の結果から南北朝時代（1376年頃）を示すものも出てきており明確にはなっていない様子。

元の地名が「難波（なにわ）」で、淳和天皇との関わりを経て「宮の床」という地名に変わったということは、王朝との深い関係が存在するように感じる。大和町の地名一覧を見ると、笹倉山の北側に「宮床字難波」という字地名が今も残っている。

また、黒川郡の郡史によれば、天正年間（1500 年代後半）には、鴫田信濃国種が宇和館城にいたと記されている。宇和館城は、七ツ森の笹倉山の東麓（現在の宮床字長倉）にあったと言われている。現在は曹洞宗西河山龍巖寺があるが、この寺の開基は天正3年（1575年）、田手式部宗時による。

城と寺の関係については調べたが、よくわからなかった。この寺には、原阿佐緒の墓がある。

天正18年(1590年)、黒川晴氏が伊達政宗に敗れ、黒川郡は伊達家の三男である伊達宗清の所領となり、黒川晴氏に仕えていた鴫田國種の後継だった鴫田国近は失職した。

しかし、鴫田国近は伊達政宗に接近して先祖伝来の馬と太刀を献上して、忠誠を示した。これにより、鴫田は伊達政宗の高い信を得て、寛永13年(1636年)に伊達忠宗が藩主になるのに伴い、鴫田周如が評定役に任じられた。吉岡の歴史に登場した奥山大学は、この時仙台藩の奉行職5人の一人で、3500石を付与された要人だった。

宮床村は、万治3年(1660年)伊達宗房が拝領して居館を構え、宮床伊達氏の初代当主となった。宮床伊達家による宮床村の支配は幕末まで続いた。

●町村制施行後の動き

明治21年に市町村制が施行されて、黒川郡には20の村が誕生した。

そして明治22年には、一町9ヶ村に再編された。制度発足初期から「町」であった吉岡は、黒川郡ではひととき大きな存在だったと言える。

明治21年	今村	宮床村	小川村	吉田村	高田村	鶴巢村	北目大崎村	下草村	大平村	幕柳村	太田村	山田村	小鶴沢村	舞野村	蒜袋村	相川村	桧和田村	報恩寺村	三ヶ内村	松坂村
明治22年	吉岡町	宮床村	吉田村	鶴巢村										落合村						
昭和30年	大和町																			

●余談

旅を終えて、様々なことについて調べたり確認をしたりしているうちに、こんなことに気がついた。

源頼朝の挙兵、平氏平定にあたり顕著な働きをした千葉常胤が、恩賞として、陸奥国五郡(伊具・亘理・宇多・行方・磐城)を手に入れたが、その内の亘理・宇多を三男の武石三郎胤盛に分与した。

武石氏4代の宗盛は、乾元元年(1302年)に亘理に入って城を構えた。(宇多=現在の相馬付近))

そして、武石氏7代の広胤が、亘理氏を名乗ったのが「亘理千葉氏」の始まりらしい。

亘理千葉氏は、その後伊達植宗の傘下に入って伊達家との関係を深めていき、涌谷伊達氏と繋がるので、千葉氏と伊達氏とが繋がっていることになる。

これまた奇縁で面白い。

以上

*関連資料

二冊の書籍といくつかの奇縁 その1 女流歌人原阿佐緒の生涯

<http://www.l.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/haraasa1.pdf>

二冊の書籍といくつかの奇縁 その2 次なる歩みの始まり

<http://www.l.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/haraasa2.pdf>

千葉さんの家系図調査 千葉氏の誕生と千葉六党の流れ

<http://www.l.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/chibasan.pdf>